

トバナラン、枕艸子、狹衣ナドニモ書レタル事ニテ、大内ニモ昔ヨリ有來タル事ヲ、民ノ上ニモ習フテ、童ノ戯ニモスル事ナランカシ、

〔諸國圖會〕年中行事大成正月十五日粥杖又粥木 今日粥杖とて松枝柴などにて、女の腰を打なり、中

略 信濃、飛驒、三河等の國には、染樛木をもつて、其長サ一尺二寸許に切、上下より削かけて、先の方に左に卷、柳櫻の花の如き物を紙にて造り粘て、松煙をもつて燻べ、其花の形を取除れば、其模様白く木に残る、是を御祝棒と號け、新婦ある家毎に入て、新婦の腰を打、兒童の戯なり、又今朝茶竹の五六尺計なるを半まで五ツ六ツに割かけて、染樛木の枝二三寸廻りなるを、長五六寸に切、件の割たる竹の先にさし、家毎に門口の軒端に、二本充これを指す、是をほんだるといふ、是豊年の祝ひ、穗垂の祝儀とす、京師近郷は、此頃兒童の戯れに、橙を糸にてく、り、通行の婦人の腰を打、皆粥木の遺風なり、

〔用捨箱上〕粥の木 折かけ燈籠 昔の質素をうしなはず、今に古風を存するは、正月の式と、七月の魂祭りなり、それさへいつの程にか絶、江戸に近き田舎には残りし事あり、其一ツ二ツを記す、

向の岡不卜撰 延寶八年印本 粥木 かゆの木や女夫の箸の二柱 才丸

撰者不卜は江戸の人なり、才丸は難波の産ながら、若きほどより江戸にあり、されば延寶の頃までは、粥木といふ事江戸にありし故、句にも作り、集にもいれしならんが、今はさる名だに聞ず、江戸近き田舎には猶在、所々にてすこしづ、異なり、此句によく合するは、越谷の東大川、戸村江戸八里の土人の話なり、彼あたりにては、正月十五日に、楊楯を長き箸程に二本きり、頭のかたを削かけのやうに作り、鍋の粥の煎たちしとき、その頭をさしこみ、すぐに引あげ打返して、門の兩脇へ一本づゝさすなりと、才丸の句是なり、粥杖を粥の木といふとは異なり、

〔枕草子〕十五日正は、もちがゆのせくまいる、かゆの木ひきかくして、家のごたち女房などの